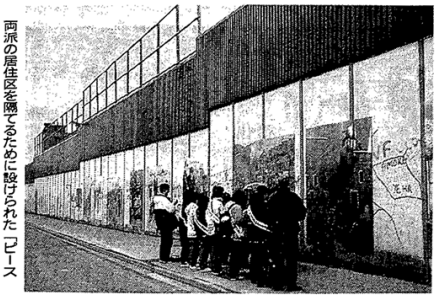
「ゆめポッケ親子隊」北アイルランド隊に同行して

色分けされた居住区


両派の居住区を隠すために設けられた「ピースウォール」。隊員たちは、北アイルランドの平和を願い読経供養を行った（ベルファスト）

親子隊一行はロンドンを経由し、空路、ベルファストに到着した。

ベルファストはかつて、紛争の激戦地であり、「爆弾都市」と言われた町だが、いまは新しいレンガ造りの家や大きなキリスト教会が立ち並び、遠方の小高い丘には放牧の羊がのんびりと草を食むなど、平和な街並みを取り戻しているようだ。

足元に視線を落とすと、縦石に青・白・赤のペンキが順序よく塗られていた。配布先の案内役を務めてくれる現地NGO（非政府機関）のコリメーラ共同体のスタッフ、キルゴール・アリステアさんに聞くと、「この三色はプロテスタントの居住区を示しています。ちなみに、カトリック居住区は、緑・白・黄の三色です」と答えてくれた。

こんなところにも両派の対立が表れている。憂うつな気持ちを抱きながら、ホテルに向かうバスに乗り込んだ。

この地に本部を置くコリメーラ共同体に今回、北アイルランドに送られたすべての「ゆめポッケ」（三千個）が託されている。同共同体は一九六五年、プロテスタントとカトリックの相互理解と信頼関係の構築を目的に設立された宗教教育組織だ。これまで、学校流など、草の根レベルでさまざまな和解プログラムを展開してきた。九七年に、第十四回歴野平和賞を受賞したのは記憶に新しい。

行程初日、一行は同共同体のトレバー・ウィリアムズ代表を本部に訪ねた。

ウィリアムズ代表は、遠い国からの来客一人ひとりを握手で迎えた。「団体名の由来は」とか「どんな活動をしているのか」といった、矢継ぎ早の質問に丁寧に答える姿は、誠実な人柄を感じさせた。

配布活動に出発するに当たり、ウィリアムズ代表は「ゆめポッケ」の役割をこう語った。

「皆さんが信奉する仏教には、『慈悲』の教えがあります。今回、多くの子どもに手渡されるドリームバッグ（ゆめポッケ）には、皆さんの慈悲心、つまり心が込められています」

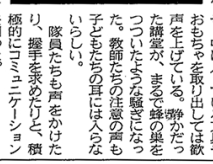
この地区は紛争中、ベルファストの中で最も多くの社会の平和を願う心が込められていると信じています。どうか、友愛の心を込めて手渡してください」

五十の銃撃で、一日に七百五十人もの死者が出たという、当時、破壊された建物はほとんど修復されておらず、激戦が繰り広げられたとは思えない。

〝ドリームバッグ〟に歓声

ウィリアムズ代表の案内を胸に一行は、配布先の小学校へ向かった。

親子隊が配布活動を行った先の小学校のうちの一校、その一つに、ベレーフォスター小学校がある。ベルファストの西部、アールドイン地区にあるカトリック系の学校



滞在中、配布校の一つ、セント・ジョーンズ小学校からおれの手紙が届いた（バリーキャッスル）

午前九時、学校に到着。隊員たちは講堂に案内された。隅のほうにポッケが配布に先立ち行われた交流会。隊員たちは手作りの地図で日本の紹介を行った（ベルファストのストランドタウン小学校）

▲段ボール箱に詰められ、山積みされている。フタの開いた箱からは、花柄やチェック柄、アニメ・キャラクターの描かれたものなどカラフルなポッケがのぞく。

ポッケの配布が始まった。親子隊のメンバーが一列に並び、学年ごとに進み出た生徒一人ひとりにポッケを渡していく。

最初は硬い表情だった生徒たちが、ポッケを受け取った瞬間、顔をほころばせ、中に入っている文具やおもちゃを取り出しては歓声を上げている。弾かだった講堂が、まるで蜂の巣をつついたような騒ぎになった。教師たちの注意の声も聞こえないほどだ。

隊員たちも声をかけたり、握手を求めたりと、積極的にコミュニケーションを図った。

「『ドリームバッグ、プリーズ』って言いながら手渡したら、笑顔で応えてくれた」と、群馬大田教会（三）＝江東教会＝さん（三）＝東教会＝は、「思い切って握手を求めたら笑顔で握手してくれました。うれしかった」と満面に笑みを浮かべた。

〝壁〟を超えた小さな懸け橋

「ゆめポッケ親子ボランティア隊」（三月二十五日～四月四日）としては、初めての訪問となった英国・北アイルランド。一行は、中心都市・ベルファストやロンドンデリーなど、かつて紛争の被害に遭った地域の小学校で配布活動を行った。北アイルランドは長年にわたり、プロテスタントとカトリックの抗争が続き、多くの犠牲者を出してきた。一九九八年に和平合意が成立した後も両派の対立は根深く残っている。こうした状況の中で、子どもたちもまた、肉親や友人を失ったり、家を破壊されたことで、精神的な傷を負われてきた。「ゆめポッケは、彼らのために何をもたらすのだろうか――現地の子どもたちのポッケに寄せる思いをリポートする。

ポッケを抱きしめ、明るい笑顔を見せる少女たち。北アイルランド社会の「共存」は、彼女たちに託されている（ベルファストのエデンブルック小学校で）

北アイルランド紛争

アイルランド島北東部、アルスター地方の六州からなる北アイルランドは一九二一年、南東部のアイルランド自由国（現・共和国）成立に伴い、イギリスの一部に組み込まれた。

人口約百六十万人。その二分の一が先住のケルト人やバイキング、ノルマン人を祖先とするカトリック系住民であり、三分の二がスコットランド人とイングランド人など、英国本土からの移住者を祖先とするプロテスタント系住民で構成されている。

この比率は、一六〇〇年代初頭に大量のスコットランド人やイングランド人が入植してから、今日まで続いている。彼らプロテスタント系住民はアイルランドを英国の植民地にしようと、政治的、経済的に先住のカトリック系住民を圧迫するようになった。

以来、英国からの分離とアイルランド共和国への統合を望むカトリックと、英国にとどまることを望むプロテスタントとの対立が繰り返されてきた。

特に、一九七〇年前後にベルファストやロンドンデリーをはじめ、各地でカトリックの過激派組織、アイルランド共和軍（IRA）とプロテスタントの武装集団（UFF）やアルスター義勇軍（UVF）が、大規模な武力抗争を展開、市民にも多くの被害者が出た。これまでの犠牲者は三千二百人以上に及ぶといわれる。

ベルファストでは、抗争の激化を防ぐため、両派の居住区を隔てる「ピースウォール（平和の壁）」が、英国政府によって造られた。和平合意がなされた現在、両派の居住区は自由に行き来できるが、壁は当時のまま残されている。

まさに夢のような…

この小学校でうれしいニュースがあった。■さん（三）＝水戸教会＝が、自分の作ったポッケを手渡したのだ。ピンク地にキャラクターの絵が描かれているポッケだった。

■さんは今回の参加にあたり、一つの願いをもっていた。自分が作ったポッケを自分の手で渡したい、という願いだった。しかし、ポッケはどの国や地域に送られるか分からない。たとえ北アイルランドに届けられたとしても、自分の手で渡する確率は三千分の一なのだ。

「キティちゃんのぬいぐるみが見えたときは驚きで一瞬、頭の中が真っ白になっちゃった」

■さんのポッケを受け取ったジョーナ・テガートちゃん（六）は、作った本人との対面に大喜び。「うれしい。このぬいぐるみがとても気に入りました。今度、手紙を書きます」と、ポッケを抱きしめた。

「ゆめポッケ」はどの小学校でも、子どもたちにとびきりの笑顔をもたらした。配布終了後、同小学校のマッケニー校長は、興奮気味にこうコメントした。

「素晴らしいプレゼントに心から感謝します。今回の出会いが好奇の始まりになることを願っています」

教師や子どもたちの喜びを目の当たりにし、行程初日に聞いたウィリアムズ代表の言葉がよみがえってきた。「心に傷を負った子どもに安らぎを与え、北アイルランド社会の平和を願う心が込められている……」。

確かに、子どもたちに一瞬でも安らぎを与えられたかもしれない。しかし、北アイルランド社会の平和のためにポッケは何ができるのだろうか。〝疑問符〟を残したまま、最後の配布校に向かった。北アイルランドでも数少ないプロテスタントとカトリックの統合校、オマ小学校だった。

社会を変える〝カギ〟に

双方の〝壁〟が大きく立ちはだかるこの社会で、相互理解と信頼構築のための教育を目指している学校だ。

プロテスタント＝シティ＝ト・クロフォード君（二）とカトリック＝ナ・マッコラさん（二）＝カトリックリに出会った。彼らはポッケをもらった感想を、日本の子どもたちの印象を聞いてみた。

「ぬいぐるみに『WE LOVE YOU』のメッセージとポッケを作った子どもの写真がついていました。友情と温かな心が伝わってきて……」と、マッコラさん声を弾ませる。

一方、クロフォード君は、「『ゆめポッケ』にはあるのかもしれない。

さらに、二人の話は根深い、子どもたちの様子を見ながら、「対立」から「共存」への願いを込めて――いま、「ゆめポッケ」の果たす役割は大きい。

机の上にポッケの中身を広げて喜ぶ子どもたち（バリーキャッスルのキルローズ小学校で）

隊員の印象について言葉や姿かたちに違いはあるのだけれど、問題にはならないと思う。一緒にサッカーしたり、折りゴルを作ったりして楽しかった。心のカベは全く感じなかった」と、相好を崩した。

「互いの違いを認めたうえで、その違いを理解しているというすばらしい姿勢――そこに、北アイルランドの平和が託されているのではないか。

そして、その機運し役が「ゆめポッケ」にはあるのかもしれない。

さらに、二人の話は根深い、子どもたちの様子を見ながら、「対立」から「共存」への願いを込めて――いま、「ゆめポッケ」の果たす役割は大きい。

こんなに楽しく遊んでいるのに、なぜ大人たちは宗教や民族の違いを引き合いに出していがみ合うんだろう？笑顔や優見を持つ人は、私たちを見てほしい！」。

そして、手にしたばかりのプレゼントを指さして、こう言った。

「『ゆめポッケ』が友情と平和の贈り物であるならば、私たちも作って、争っている大人たちに贈ってあげなくてはいけないね」

今回の配布活動に付き添い、子どもたちの様子を見作ったりして楽しかった。心のカベは全く感じなかった」と、

「『ゆめポッケ』は社会を平和にする力があるのだ！」

美しい街並み、おいしい食べ物、子どもたちの明るい笑顔……。北アイルランド社会は一見、平和そのものように見えるが、長年続いた両派の対立は、人々の心にいまだ根強く残っているのも事実だ。

「対立」から「共存」への願いを込めて――いま、「ゆめポッケ」の果たす役割は大きい。

佼成新聞2001年4月27日付